

I 遠い旅の始まり

ある日、とつぜん	5
一九四四年五月	5
暗い海峡をこえて	8
はじめての日本	10
祖国・黄海道谷山の記憶	12
到着の一夜があけて	16
軍隊式の訓練	18
炭鉱の掘進夫として	21
ランチ場面の目撃	24

強制労働の日々

強制労働の日々	27
とつぜん禁止されたお盆の外出許可	27
逃走への意志	31
「非国民」の烙印	36
二重の差別のなかで	42
外出組が帰ってくる	45
食堂の監視人ふえる	50
三人の脱走者	53
食堂でのできごと	57
坑内での仕事	61
おこげご飯の秘密	66
大本営発表のウソ	69
祖国への想い	71
弁当のこと	74
坑内での厳しい作業	76
はじめての給料	77

II 海峽のみえる場所まで

祖国からの手紙	83
脱走へ向けて	84
十一月から給料が上がる	88
脱走計画	91
最後の食事	95
外出許可がおりる	96
決行	99
運命のバスに乗って	104
バスの中で考えたこと	107
III みえない祖国を抱いて	115
炭鉱逃亡者	117
唐津の町	117
衛兵所へ迷いこむ	119

メモをたよりに	125
橋の上での出会い	129
白米ご飯に朝鮮漬	134
無事宿舎に入る	138
新しい名前で	142
私は生きる	148
陸上げ作業	148
福岡県の小さな漁村へ	152
さらに西へ	154
多々良青年学校	155
三度めの出奔	158
松汁の記憶	160
板付飛行場の整備作業員として	162
再度の潜行	165
ドラム缶の雨	169

はじめての汽車	172
三百円で仕入れた情報	176
朝鮮総督府の行い	179
人間の叫びとして	181
父の生きざまを胸にだいて	184
李東珣	
体験記をお願いして	187
室田卓雄	
書き終えて	191
李興雙	

アボジから娘へ

私は朝鮮人です。昭和五十三年でちょうど五十歳です。日本の年号でいえば昭和三年生まれです。私は日本に来て三十三年目です。昭和十九年五月に日本の土を踏みました。私には現在中学三年生の娘がおります。子供は二人おりました。現在の中学三年生の女の子の下に、それも娘の子がいました。その子は交通事故で昭和四十九年に死にました。現在は私と今の中学三年生の子と二人きりの生活です。この中学三年生の娘からお父さんの歴史を書きたいといわれて、これから私が日本の土を踏んで三十三年間の生きざまを話したいと思います。

私は自分の親しい人にはよく自分の生きてきたことを話しますが、この娘にはくわしく話したことがありません。それはわかってくれそうにないからです。私が生きてきた時代と、今の世の中とは夢にも思えないくらい変わっているからです。私がこれから話すことを今の中学生が理解するとしたら、それは大変なおどろきになります。とはいっても、私は歴史に残るような生き方をしてきたわけではありません。それは取るにたらない生きざまであります。なんの望みもなく、なんの楽しみもなく、といって死ぬような苦しみを味わった生きざまでありません。自分ではごく平凡な生きざまでではなかったかと思っております。

